

朝を  
ひらく

永田 円了  
真国寺住職



学生時代に読んだ遠藤周作著「沈黙」。昨年マーティン・スコセッシ監督の手によって映画化され、今年日本でも上映された。半世紀を経た今も強烈なインパクトをもって内面に迫ってくるものがある。

難解な作品である。遠藤はこの小説で何を語ろうとしたのであろうか。神の存在、背教の真理、キリスト教信仰の根源的なテーマなど、人間の内面に一刻一刻と迫る問いかけが余韻として残る。

時は戦国の乱世、人々が救いを求めたのはキリスト教だった。信者の数は爆発的に増え、

「沈黙」を再考する

弾圧が起こった。16世紀から17世紀半ばまで、おびただしい数のキリシタン信者が迫害された。

踏み絵がキリシタン狩りに使われた。信仰をつらぬいて殉教者となるのか、転んで棄教するのか、究極の選択が要求されたのであった。

キリシタンであるにもかかわらず、簡単に裏切り行為を繰り返すキチジロー、この人間の弱さ、ずるさにいら立つ神父ロド

リゴだったが、最後には苦悶の末、踏み絵を踏んで棄教してしまふ。神はなぜ救いの手を差し伸べてはくれなかったのか、なぜ「沈黙」したのか。原作者、遠藤はいつたこの作品で何を言いたかったのか。人間の弱さを象徴するキチジローの存在は、読者に何を問いかけているのだろうか。

例えばこういうシーンを想像してみよう。深夜の地下鉄に乗っているあなた、前の席に酔っぱらった男がだらしない、身体をよじるようにして寝込んでいる。おそらく飲み過ぎでどこかで吐いたらしく上着が汚れ悪臭も漂っている。それを見てあなたはこう思うのか。俺はこんな男とは違う、と考えるのか。

るのか、いや俺だってこの男と変わりない人間だ、と思うのか。

キチジローの存在は、まさにこの問いを私たちに投げかけているのではないか。人間の弱さ、ずるさ、汚らしさを自らのものとして受け入れられるのか。きっと遠藤はキチジローの中に自分自身を見たに違いない。

何年前か前、国民の声を代弁した記者の質問に、「あなたと違うんです」と言った某首相を思い出す。自らを善人という殻のなかに入れることで、どれだけ人生を深めることができるのだろうか。

もっとも罪深きキチジローが、逆説的に我々の「魂の指導者」になりうる。学生時代には見えなかったことが今少し見えてきたような気がする。

他者の弱さを受容する